



# 異界の魔術士 4

ヘロ一天氣

*HeroTennki*



レジーナ文庫

# 登場人物紹介

## プラット

『銀月の牙』という  
傭兵团を率いる  
傭兵团長。  
冷静沈着で寡黙な男。

## アンバッス

フレグンス辺境騎士団の  
中隊長。  
無骨な古強者の騎士で、  
情に厚い。

## 拓朗

朔耶の幼馴染で、  
元ミリタリーオタク。

## 孝文

朔耶の弟。  
機械好きの理屈屋。

## 重雄

朔耶の兄。  
萌えオタで妹好き。

## バルティア

昨今傀儡より脱却した  
グラントルモス帝国皇帝。  
朔耶をこよなく愛する24歳。

## レティレスティア

『精霊の国』と名高い  
フレグンス王国の王女。  
優れた精霊術士。16歳。

## 都築朔耶

異世界で「発明家魔術士」  
となつた女子高生。  
機械弄りと武道と人のせる  
演技が得意な18歳。

## ガリウス

名のある門閥貴族の  
次男だが、王都から  
地方へと飛ばされた  
曰く付きの不良騎士。

## ブラハミルト

『知の都』と呼ばれる  
大国ティルファの  
最高指導者。  
魔術士でもある。

## 目次

異界の魔術士 4

書き下ろし番外編

ジャックの約束

異界の魔術士 4

## 序章

「ただいまー」

「おかれりー、お風呂沸いてるわよー」

庭先に帰還した朔耶を、母のノンビリした声が迎える。

近所の神社にいた精霊と契約を交わして以来、こうして度々異世界と地球を行き来するようになった朔耶。母もすっかり娘の異世界往来には慣れたらしい。

朔耶は居間に上がり、弟孝文とアイディアノートを弄りつつ兄重雄が帰宅するのを待つ。そして三人揃ったところで知の都と呼ばれる大国、ティルファでの顛末を語つた。

「という訳で、船外機のお披露目は大成功でした！」

「おおー」

「やつたなー」

朔耶達の設計で作られた推進器、すなわち船外機をつけた機械船で、ティルファの水

軍高速艇に勝ったという話。

先日、朔耶達は異世界の街、カースティアの観光事業の一環として特殊な釣り船観光を考案し、船三艘の手配を進めていた。

最初は機械船そのものの安全性を疑問視するティルファの船大工ドマックに、造船を拒否される。それでも食い下がる朔耶に、ドマックは『水軍の操る高速艇と競争して勝つたら造つてやる』という無茶な対戦を提案してきたのだ。結果は朔耶の圧勝だった。

オレンジジュースとコーヒーとビールで乾杯して喜び合う兄姉弟達。

「結果的に機械船の知名度は急上昇、観光事業でかなりの客寄せになるなー

「うん、タカ君のモーター、これからも期待してるからねー

さしあたつて残り二艘分の船外機を使う魔力石モーターを作り、それから他にも色々な用途に使えるようにモーターの小型化についても試みる予定だ。とはいえて朔耶が見た限り、ティルファの研究者達も意外と早くモーターの類を自力で作り出しそうな勢いだつた。

「多分、魔術式で似たようなのを作っちゃうんじゃないかなあ」  
「さすがに魔力石の細かい加工はまだ無理か」

「サクヤ式モーターの心臓部は魔力石使用の反発力ユニットだから、これが作れない限

り朔姉の優位性は揺るがないな」

朔耶のような精靈と重なる者ならともかく、普通の人間には地球にある高性能の工作機械でも使わなければ魔力石の細かい加工は難しい。そのためティルファの研究者が自前の反発力ユニットを製造するには相当な時間が掛かる、と孝文は予測した。なので今之内に反発力ユニットを単品で売りに出す事も検討する。

「機械船みたいな乗り物に使えるレベルのモノは、しばらくは朔姉の工房でしか作れないって事で」

そのうち天才が現れるなり加工技術が進むなりして、向こうでもそこそこの物が作られるようになるだろうという結論に至った。

ひとしきりティルファの技術力談義をした後、朔耶は観光事業が軌道に乗った後の計画、『屋形船作戦』について切り出した。

戦後処理などで最近ずっと忙しくしている近衛騎士団長イーリスと、彼に構つてもらえず寂しそうにしているレティレスティア。そんな二人の間を何とか取り持つてやりたいと考えた朔耶の作戦だ。

「お姫様と護衛の騎士かー王道だな。そういう場合は切っ掛けさえあればダーツと行きそうなんだけどな。例えば……」

『イーリス？ 何故ここに……』

『レスティア様が、逢引あいびきをしているという噂を耳にしまして……』

『まあ！ 酷いつ、私の事をそんな風に見ていましたのね！』

『いえ、私はレスティア様を信じております。ですが、逢引は事実のようです』

『どういう、意味ですか？』

『……それは、こういう事です！』

『ああっ、イーリス……いけません、こんなところで』

『つてな感じで——ん？ どうした朔耶』

何やら覚えのあるシミュレーションにがつり落ち込む朔耶を見て、首を傾げる兄殿。「まあ、重兄の妄想シミュレートはともかく、忙しくて時間が取れないってのは仕事を任せられる部下がいないせいだと思うぞ？」

騎士団長としてまだ若いイーリスは、回つてくる仕事をほぼ自分一人でこなしているのだろう、仕事を任せられるぐらい優秀で信頼できる部下を養成するところから始めるべきだと話す孝文。

『なるほどー、さすがタカ君』

イアが無いか訊ねてみた。カースティアの派遣騎士団の騎士達は、朔耶が本部の食堂に入れば途端に静まり返るし、廊下ですれ違う時など反対側の壁にぴたり寄つてこちらの様子を窺つたりするのだ。露骨なまでの警戒ぶりだった。

「ふつーに接してたらいいんじゃないかな」

「えへ、だつて怖がつて近付いて来ないんだよ〜？」

「だからつて無理に近付けば逆効果だよ。自然に振る舞つてればそのうち向こうが慣れ

るつて」

「そうなのかなあ」

確かに朔耶は、カースティアに詰めている騎士達とはまだほんの数日、それもわずかな時間しか顔を合わせていらない。とりあえず今度行く時は弟の言に従つてみる事にした。

### 【朔耶】

翌日、友人達と平穏で楽しい学校生活を過ごした帰り道、自宅近くで男の子に声をかけられて振り返る。

「あ、拓ちゃん」

幼馴染の男の子、鳥越拓朗。昔はよく兄と弟と一緒に、朔耶とつるんで遊んでいた。

小さい頃から家族ぐるみの付き合いがあるので、ほとんど兄弟と変わらない存在だ。改造好きの行動派であり格闘オタクな兄と、その発想力で兄の改造方針を支えた理屈屋の弟。そしてそれらの元ネタとなる様々な防犯グッズを提供してきたミリタリーオタクの拓朗。朔耶に多大な影響を与えた三人の内の一人である。ある意味、朔耶の必殺技『稻妻ビンタ』は、この三人とつるんだ経験の集大成とも言える。

最近は少し疎遠になつてゐるが、会えば昔と同じく自然に会話が出来る、そんな関係である。

「どうしたの？」

「……お前、俺に何か言う事があるんじゃないのか？」

真剣な表情でじつと目を覗き込んで来る拓朗に、「んん？」と小首を傾げて惚ける朔耶。

「ちよつと来い」

「え、あ、ちよつとつ

むんずと朔耶の腕を掴んだ拓朗は、そのままグイグイ自分の家へと引っ張り込む。玄関に入ったところで、居間にいた拓朗の母親みよさんが声をかけてきた。

「あらー朔耶ちゃんー久し振りねーー！」

「みよさん、ご無沙汰してますーって、ちよつと拓ちゃん待つてよ」

挨拶する母親を煩わしそうに見ながら朔耶を二階の自室へと引つ張つていく拓朗。この家の階段は急なので、腕を取られたままではバランスが取り辛い。朔耶は拓朗に抗議した。兄直伝のやり方で。

「やだ、痛いよ拓ちゃん……お願い、放して」

「ぶつ！ お、お前な！」

懇願するような媚びた声色を使いつつ朔耶がしゃがみ込む。すると、「んまー！」と声を上げたみよさんが、パタパタとスリッパを鳴らしながら駆けて来る。

「んまーダメよ拓郎ちやんー朔耶ちやんには優しくしなきやあ！」

拓朗は「うわちやーっ」と天を仰いだ。

「みよさあーん、拓ちやんたら無理矢理あたしを部屋に連れ込もうとするんですうー」「んまーダメよねーイケナイわよねー無理矢理なのはよくないわあー、でも男の子ならちょっと強引なくらいがいいわよねー？」

「あーーもうつ悪かつたから！ 僕が悪かつたから母さんはすつこんでてくれ！」

「んまー酷いわ拓朗ちやん……」

おおむねこんな家族であった。

夕日の射し込む窓を背にしてベッドに腰掛けた朔耶は、「なんか前よりスッキリしたねー」と部屋を見渡し、それから、

「で？ あたしに聞きたいことって？」  
と拓朗を促す。

「シゲ君とタカ君に聞いた」

「ありやま」

拓朗は朔耶の異世界旅行について都築家の兄弟から聞かされたらしい。そして何故自分には一言も話さなかつたのかと問い合わせてくる。

「んー、だつて軽々しく言いふらせる内容じやないつしょ？」

「だからって、黙つてる事はないじゃないか。俺だつて話を聞いてれば色々協力できたのに……」

最後の方はごによごによと聞き取りにくい小声になる。つまりは家族も同然の仲なのに内緒にされた事が気に入らないようだ。

「ごめんね、拓ちゃん……拓ちゃんに迷惑かけたくなかったの」  
朔耶はベッドのシーツを指で弄びながら、俯き加減でそつと枕を胸に引き寄せる。

「迷惑だなんて……」

「つていうのは建前で、あんま知つてる人増やすと面倒だからってのが本音です」「……お前は……」

胸に抱えた枕を頭に載せてそんな事をのたまう朔耶に、こういう奴だったと脱力する拓朗。

事情をかいつまんで話した朔耶は、拓朗に対し、家族には明かさないようになると念を押した。

荒唐無稽な話だとしても、朔耶が先日約二ヶ月にわたって失踪していた事は事実なのだ。話が広まれば、色々と変な探しを入れてくる輩<sup>やから</sup>が出てこないとも限らない。枕で巨大リーゼントとかやりながら真剣に話す朔耶に、拓朗も理解を示す。

そして今後は彼にも、魔力石を使った道具の開発や、異世界への干渉についての相談メンバーに加わってもらうという事で話がまとまつた。

「それにしても、拓ちゃんの部屋に来るのも久し振りだねー。随分大人しい雰囲気になつたじやない」

改めて『幼馴染の男の子の部屋』を見渡す。以前はモデルガンやらコンバットナイフやらが壁にたくさん飾つてあつたが、今は上着とかカレンダーが吊つてある程度だ。  
「まあ、俺もいつまでもミリオタやってる訳じゃないさ』

「ふう～ん、拓ちゃんも成長してるんだ？」

そんな返しに苦笑しながら、拓朗は朔耶と玄関まで一緒に下りる。そして明日にでも都築宅に行くと言つて朔耶を見送ったのだった。

「俺等なんでデコピン喰らつたんだ……？」

「うーむ……謎だ」

## 第一章 孤児院の娘

まだ薄暗く、肌寒い空氣の漂う夜明け前。

「今から行くのか？」

「うん」

今日は幼馴染の拓朗が転移の瞬間に立ち会うため、都築宅を訪れていた。  
「それじゃ、行つてしまーす」

「おう、気をつけてな」

いつもの動きやすい格好で自宅の庭先に出た朔耶は、不思議な光に包まれたりとか、派手な魔法陣を浮かべたりするでもなく、ただ静かにオルドリア大陸へと転移した。目の前で音もなくスッと消えた朔耶に、拓朗は一瞬目を瞠る。

「ほんとに、特殊効果も何もなしにいきなり消えるんだな……」

「帰ってくる時もイキナリだからな、あの円の中にはに入るなよ？」

重雄の指示した先には、朔耶の転移場所の目印として円が描かれていた。

「ここはどこかな～？」

まだうつすらと星が見える朝焼けの空。陽光を受け金色に縁取られた雲が遠くに見える。立ち並ぶ街灯の先には、白亜のテラスと大きな階段。

『つて、お城のそばじゃん！』

コンカイハ トクニ ケハイガ ツヨカツタ

前回と同じく、フレグンスの精霊の気配を目指して転移したところ、最もそれが強く感じられた場所がここだったという。王族の『血』と盟約を結ぶフレグンスの精霊が、城に近い場所にいてもおかしくはないが、今までほどこか街中に出るのが常だつたため

朔耶は驚く。とはいせつかく来たのだからと少しばかり立ち寄る事にした。

いつも空から直接城の敷地内に下りてくる朔耶が、今日は珍しく入り口から現れた事に、衛兵が目を丸くする。

『おつはよーレティ、起きてる?』

——サクヤ？ おはようございます、ちょうどお茶をいただいていたところです——

『そつか、これから祈りの儀式だつけ?』

——はい。最近はサクヤが重なつていて精霊も感じられるようになつてきました——なるほどそれで城の近くにいたらしい。フレグンスの精霊がレティレスティアと交感を繋ぐ日も近いかもしれない。

しばらく城内をぶらぶら歩いていた朔耶は、儀式のため地下神殿に向かうレティレスティアと合流する。朔耶が一緒という事で、いつもゾロゾロ付いて来る護衛の騎士やら神官達には外してもらつた。普段なら肅々と進むだけの道程を、今日に限つてはお喋りしながら楽しく歩く。

途中、イーリスの話題になつた。ああいう真面目で奥手な男にはこちらから積極的にならないと進展しない、だから追つちやえと囁ける朔耶に、レティレスティアは「母様にも同じ事を言われました」と軽く溜め息を吐く。やがて地下へと下る二人。

「じ〜〜」

「もう、サクヤつたらまた……そんなに見つめないで下さい」  
 儀式用の薄い衣に着替えたレティレスティアを、朔耶が『ええ身体しとるなあ』とおつさん目線で見つめている。恥ずかしがるレティレスティアが抗議するも、その様子がいちいち可愛らしい。一度視られる事への羞恥を覚えてしまったためか、過剰に反応している。

「そういうとこイーリスに見せたら一発な気がするけどなあ」

「そんなつ、こ、こんな格好で……無理です、恥ずかしいです」

「ふーむ、イーリスとレティにも、レイスとフレイの十分の一でいいから積極性があればなあ……」

あの二人は人の目がなければあつちでイチャイチャ、こつちでイチャイチャ、イチャイチャ三昧だと評する朔耶に、レティレスティアも赤くなりながら小さく頷く。どうやら城内で二人のイチャイチャを目撃した事があるらしい。

そんな調子でからかい半分、可愛がり半分、楽しみながらレティレスティアを送った朔耶は、地下神殿の前で別れて地上に向かう。

今日もカースティア観光事業関連で色々と飛び回る予定であった。だが今のレティレ

ステイアとのやり取りで、先にやるべき事が出来たので、朔耶は王宮区画にある丘舎に向かう。

「おー、訓練中かあ」

兵舎近くの訓練場にて、合同訓練中の近衛騎士団と聖騎士団を見つけたので、そちらに足を向ける。

近衛騎士団よりも豪華な甲冑を纏う聖騎士団は、精霊神殿に属する騎士団で、王国騎士団並に高位の存在である。近衛騎士団と同じく指揮系統が独立しており、神殿の意向が最も尊重されるので、王権も無理には介入できない特殊な立ち位置だ。

ちなみに、王女であるレティレスティアは個人的に聖騎士団を動かせるが、それは彼女がその精霊術の才によって神殿内である程度の地位を築いているからだ。同じ理由で王妃アルサレナも聖騎士団を動かす事ができるが、その夫であるカイゼル王は神殿内では大口の寄付者という立場でしかないと想いのままにとはいかないらしい。

「あ、いたいた」

模擬戦形式の訓練に勤しむ集団の中に、訓練用の槍を豪快かつ纖細に振り回しているイーリスの姿を見つけた。

回転運動から突きに転じて相手の武器を絡め取る纖細な槍捌き。一方対戦相手の聖騎

士団長も盾を駆使して必死にそれを捌いていた。しばらく攻防は続いたが、訓練終了を告げる鐘の音を合図に両者は動きを止めた。聖騎士団長が息をつきながらイーリスに声をかける。

「今日はいつものキレがありませんでしたね」

「いや、そちらの腕が上がっているという事でしょ？」

同じく息を整えながらそんな言葉を返すイーリス。兜を脱いだ聖騎士団長は、頬に張り付いた金髪を脇に寄せ、額の汗を拭つた。

フューリ・テレシア聖騎士団長。女性ながら聖騎士団の中で唯一、近衛騎士団長イーリスとともに打ち合える騎士で、少し彫りの深い凛々しい顔立ちをしている。

「随分上達されたと実感しますよ。私もうかうかしていられません」

イーリス団長の言葉にフューリ団長は、澄んだ青い瞳に敬意と喜びを籠めて微笑んだ。

そこへ、小さく手を振りながら朔耶がやって来る。

「イーリス！」

大勢の騎士達が居並ぶ訓練場を、泥の塊を避けながらちょこまか歩く朔耶。近衛騎士達は朔耶と交流する機会も多かつたので、「おー、サクヤ様だ」とか「相変わらず小さいな」と囁いては和んでいた。一方、ほとんど面識の無い聖騎士団員達は、噂に聞く「黒

髪の戦女神」の登場で緊張した空気に包まれた。

「サクヤ殿、どうなされました？」

「うん、ちょっとイーリスに話したい事があつたの」

朔耶は、孝文が言つていた『仕事を任せられるぐらい優秀で信頼できる部下の養成』を勧めてみた。

「イーリスが忙しすぎるのは、何でもかんでも自分で背負い込んでるせいだと思うのよね」

「否定はしませんが……しかし、重要な仕事ですので」

「だからあ、その重要な仕事を任せられる部下を使つて言つてる訳じゃないよ？」

複雑な表情で言いよどむイーリス。朔耶は彼の懸念を察して一言告げる。

「別にサボるために部下を使つて言つてる訳じゃないよ？」

するとイーリスは一瞬、ハッとした表情を見せた。なるほどこれは眞面目の塊だと、

朔耶は弟の読みの冴えに感心した。そうして決め手の口説き文句を放つ。

「つ！」

「愕然として立ち尽くすイーリス。実際には信頼していない、などという事は無いのだが、その真面目さと責任感の強さゆえに『私は部下を信頼していなかつたのか!』と衝撃を受けたらしい。

「そうですね……将来の事を考えれば、そういう上に立つ者としての能力を鍛えてやる事も必要でした」

助言を真摯に受け止めるイーリス。だがその様子を見ていると、今度は部下の養成にかまけてレティレスティアと会う時間を取らなくなりそうで心配になつてくる。なので、レティレスティアの話題も少し振つておく事にした。

「レティつて結構胸つきいよね、肌も白くて綺麗だし」

「ぶふつ！ い、いきなり何を……！」

上に立つ者としての在り方を示唆する言葉に深く感銘を受けていたところへ、唐突な話題転換。しかも王族を対象に性的な意味合いを含む、あり得ない話題にイーリスは声を詰まらせた。

「ゴホンッ。サクヤ殿には、もう少し慎みを持つていただきたい」

「ふーん」

ぐぐつと目を覗き込んでくる朔耶に、イーリスはたじろぐ。

この黒真珠にも似た瞳に見つめられると、胸の内を見透かされているようで落ち着かない。今の話題転換で思わず想像してしまった事にも気づかれた気がして、ついつい目を逸らしてしまう。そんな葛藤中のイーリスからひょいと視線をずらした朔耶は、後ろに立つ女性騎士に声をかけた。

「イーリスと打ち合えるなんて、凄いね」

「え……い、いえ！ 勿体無いお言葉です」

まさか声をかけてもらえるとは思つていなかつたフューリーは、慌てて背筋を伸ばして礼を執る。精霊の力をまるで精霊そのものであるかのごとく振るう朔耶は、精霊神殿にとつて崇め讃えるべき存在であり、精霊術を駆使して戦う聖騎士達からすれば、まさに憧れの対象であった。

「さて……それじゃあ、あたしもう行くね」

二歩、三歩と下がつていーリス達から距離を取ると、朔耶は魔力のオーラを纏つて漆黒の翼を噴出する。どよめく訓練場に光が溢れた。同時に訓練で酷使された騎士達の身体が癒されていく。

「以上、特別査察官からの特別サービスでした！」

そんな台詞を残して王都の空へと舞い上がつた朔耶は、カースティアを目指して飛ん

でいく。

**近衛騎士達は相変わらず気さくで面白い方だなあと談笑し、聖騎士達は噂に聞く癒しの光を受けられた事と、その大きな治癒の力に感動していた。**

「ポンプ、ちゃんと届いてるかなあ」

三時間半ほどでカースティアに到着した朔耶は、騎士団本部の屋上に降り立つと、一階の受付を目指して建物内をてくてく歩く。先日、フレグンスの馴染みの工房で作つてもらった手押し式ポンプと革のホースを、こつちに運んでもらえるよう配達業者に依頼しておいたのだ。

途中すれ違う職員や騎士達が、不意に現れた朔耶に対し表情を凍らせて壁際に避けるなど、相も変わらずな恐怖つぶりを見せたが――

『なんか慣れたね』

サクヤガ サキニ ナレテシマツタカ

騎士達が朔耶に慣れる前に、朔耶の方が騎士達の反応に慣れてしまった。

『ようサクヤ、相変わらず急に現れてんな』

『ガリウス、まだ受付に座つてんの?』

「あー、ここ担当が復帰するから俺は今日までだぜ」

臨時受付担当のガリウスが答える。先日起こったフレグンスの衛星国家サムズによるカースティア侵攻。それに先駆けた和平会談襲撃事件によつて、派遣騎士団は壊滅状態に陥り人手不足が続いていたが、それも徐々に解消しつつあるらしい。

「そういうや王都から荷物が届いてたぞ。なんだありや?」

そう言つて、ガリウスはフロアの隅に積んである荷物を指した。朔耶は「よしよし」と荷物の中身を確認すると、早速食堂脇にある井戸にポンプを設置しようとする。(ガリウスはどうせ面倒くさがつて手伝わないだろうし、そもそも受付係は席外せないよね)

半分木製とはいえ、手押しポンプは結構な重さがある。一人で作業をするには少々辛いので誰か暇そうにしている者はいないかと周囲を見渡し、適当に目を付けた騎士に声をかけた。

「そこの人、ちょっと手伝つて」

「じ、自分が、で……ありますか?」

おつかなびつくり朔耶の助手を務めた騎士は、最初こそやたらと緊張していたが、朔耶の気さくさに触れ、作業が終わる頃にはすっかり打ち解けていた。

「いいですね、これ

「便利でしょ？ 他の人達にも使い方を教えてあげてね」

一仕事を終えて一階のロビーに戻った朔耶達。出て行く時は緊張で顔色<sup>がんじゆく</sup>を失っていた騎士が、朔耶と談笑しながら戻って来た事で、他の職員や騎士達は一様に目を丸くしていた。

「終わつたか？ フランとスラントから観光事業の下準備の報告が上がつてるが、……聞くか？」

「当然っ！ で、どんな感じ？」

ガリウスは、朔耶が作業している間に纏めた観光事業関連の書類を手に、必要な人員の手配や施設建設準備の進行具合などを報告した。

「ふんふん……施設とかの建設は上手くいってるみたいだけど、人員の確保が滞つているわけね」

「まあ、儲かるかどうか分からねえ内からほいほい協力してくれる奴はそういうねえからな」

「そうだね、その辺りはあたしが直接回つて話をつけてみるよ」

「ほう、特別巡察官殿自ら足を運ぶつてか。今更だがお前、本当に変わつてんなあ」

からかうようにそんな事を言うガリウスに、朔耶はふと、彼に対するある人物の評価を思い出した。

「アンタもしつかり協力してよね、ルティも期待してたよ？」

「ルティ……？ って、まさか……」

書類をひらひらさせていた手を止めて、怪訝<sup>けげん</sup>な表情になるガリウス。

「ルティレイフィア第二王女様」

「げつ、姫さん帰国してんのか！」

あからさまに嫌そうな顔をするガリウスに、今度は朔耶が怪訝な表情になつた。

ガリウス曰く、顔を見れば必ず手合せ挑まれるらしい。しかも剣術がなかなかに達者で、魔術と精霊術も絡めてくる上に実戦慣れしているから本気で手強い。

「絶対屹<sup>おき</sup>に使つた事を根に持たれてるぜ……」

数年前、王都に巢食つていた犯罪組織を壊滅に追いやつた第二王女誘拐事件。一部の大貴族達が組織の活動を黙認し、周りに圧力をかけていた事もあり、当時はカイゼル王やアルサレナ王妃の耳にも情報が届かなかつたらしい。その誰もが手を出せなかつた組織を潰すため、ガリウスは度々お忍びで街に出ていたルティレイフィアを利用したのだ。

どうにも苦手なんだよなあと、ガリウスは眉をひそめながら頭を搔く。

「なんだそりや？」

「こつちの話よ」

朔耶はガリウスがルティレイファイアを苦手としている事にも驚いたが、それよりもルティレイファイアの写真を渡して特徴を伝えただけで彼女のツンデレ属性を見抜いた実兄に驚いた。

朔耶のルティレイファイアに対するイメージでは、ガリウスの前に出れば普段の勇ましさや凛々しさが影を潜め、『もしもじ乙女モード』になると思われたからだ。そんな風に別の意味でガンガン攻めていたとは思いも寄らなかつた。

「屋形船作戦にも第二案が必要かもね……」

昼からは、釣り船観光事業に参加、もしくは前向きに検討してくれている宿屋に挨拶をして回る。彼らには釣り船と連動し、客の釣った魚を料理して出してもらうつもりでいる。

しかし他の客達との食事の作り分けや、釣り船上で怪我人が出た場合など不測の事態

に対応できる体制作りには、手間やコストも掛かる。さらに経営に余裕があり、貴族も利用できるそれなりに立派な宿、という条件もなかなかに厳しいため、今になつて尻込みするところもあつた。それでも、協力してくれる宿にはサクヤ式コンロを提供する旨を伝えると、交渉もかなり進むようになる。

「お噂はかねがね聞き及んでおりました。実際に某貴族邸にて拝見した事もありますが、あれは良いものです」

宿屋を回り終えると、次は湖周辺に向かい、今回協力してくれる漁師達の家を回る。夜の操業も可能か、何日連続で仕事が出来るかなど色々と話を聞き、給金の交渉なども行う。漁師達曰く、

「ふう、これで宿と人員は大体確保できたかなー」

夕方頃、交渉を終えて街に戻つて来た朔耶が本部に入ると、受付前で何やら悶着が起

きていた。受付にガリウスの姿は無く、代わりに見知らぬ職員が詰めている。どうやら復帰した受付担当らしい。

「お願ひします、もう明日の食べ物もないんです」

「ですから、こつちも資金に余裕がないんですよ」

担当職員は、援助を訴えてカウンターに縋りつく女性を困った様子で諭<sup>さし</sup>している。見れば女性は二十歳過ぎか、灰色にも似たくすんだ銀髪に薄い翠眼<sup>すいがん</sup>をして、継ぎはぎだけのローブを纏<sup>まとい</sup>っていた。

「ねえ、どうしたの？」

朔耶は声をかけてみる。振り返った担当職員は朔耶を見て一瞬顔を引き攣らせたが、なんとか気を取り直しこの騒動について説明する。

「じ、実はこちらの方が、騎士団に資金援助を訴えているのですが――」現状、この派遣騎士団本部に経済的な余裕は無く、むしろ不足している。そのため援助は不可能だと諭しているのだが、なかなか引き下がってくれないのだという。

「ふむふむ、貴女<sup>あなた</sup>のお名前は？」

「は、はい？　えと……」

「あたしは朔耶。一応この関係者だから、あたしが話を聞くよ」

「はあ……あの、わたしはこの街で孤児院を預かつてているアマレストと言います」聞けば、彼女自身その孤児院の出身者であり、見よう見まねで覚えた拙い魔術を使って院長を手伝い、孤児院の子供達と共に石売りなどをして生計を立てていた。だが、高齢だった院長が亡くなつてからは孤児院の経営も上手くいかず、院長が残してくれた蓄えも減る一方。

そして先日、和平会談襲撃事件が起きた日の夜。押し入つて来た武装集団によつて院内は荒らされ、最後の蓄えが略奪されてしまつた。それからは経営が完全に立ち行かなくなり、明日食べるものにも事欠く有り様だという。

「あの襲撃事件の後、両親を失つた孤児達が大勢うちへ預けられました。でも……」

「孤児院への援助はほとんど無く、このままでは子供達を飢え死にさせてしまうと必死に窮状を訴えるアマレスト。<sup>きみじみ</sup>」

「ふーむ、その孤児院の規模と状態は？」

朔耶が職員に訊ねる。以前、ガリウスが意見書の束を整理していた時に、孤児院への資金援助を乞うモノをちらつと見たような記憶がある。職員は書類を片つ端から引つくり返しながら「記録の担当が！」とか「要望申請書の控えが！」などと唸り始める。どうやら把握できていないうらしい。

「じゃあ直接見に行きましょうか。アマレストさん、案内してくれる?」

「あ……、はい」

がつくりと落ち込んだ様子でとぼとぼ歩き出すアマレスト。

彼女は心中、失意と悲嘆に暮れていた。何とか子供達を助けてもらおうと、怖いのを我慢して騎士団本部に来たものの、結局援助は引き出せなかつた。今日も子供達に食事をさせてやれそうにない。

(みんな、ごめんね……)

職員の対応から見て、この異国風の少女はフレグンス貴族の令嬢か、あるいは騎士団本部の偉い人の縁者なのだろう。彼女が孤児院の現状を見てどこまで口添えしてくれるかは分からぬが、少しでも情けをかけてもらえるよう精靈に祈る。そして『いよいよとなれば、もうこの身を売るしかない』と、アマレストは悲壯な覚悟を懷いていた。

日暮れの街では、建物の窓明かりや、商店の入り口にあるランタンが通りを照らし始めている。繁華街は人通りも多く賑やかだ。アマレスト達の孤児院は、その表通りから外れた静かな区画にある。

「ここです……」

「え、ここっ?」

アマレストが立ち止まり、見上げる視線で示した古い建物。

そこそこ大きな屋敷ではある。だが入り口の扉は壊れ、中は真っ暗。しんと静まり返り、壁に開いた大きな穴が継ぎはぎの布で塞がれている。この建物が視界に入った時、ただの廃屋かと思つていた朔耶は面食らつた。

「な、なんか、人の気配がしないんだけど……」

「皆おびえて奥に籠もつてます。押し入つてきた人達に調度品やランプの類まで盗まれてしまつて……、わたしや子供達は地下に隠れていたので無事でしたけど」

廃墟のような建物を哀しげに見つめながらそう説明するアマレスト。朔耶は意識の糸を伸ばして建物内を探り、奥の方に固まつてゐる十数人の存在を確認した。  
『これは……、建物の修繕費くらいなら支援しようと思つたけど、そんなレベルじゃないね』

ナカノモノ ミナ ウエテオルナ

自分の工房からどこまで支援できるかと、朔耶が考えていたその時。

「ん? サクヤじやねえか。何やつてんだ、そんなどころで」

よく知つた声に振り返ると、カンテラをぶら下げたガリウスが、部下の面長騎士クラ

ンドルと連れ立つて通りの向こうから歩いて来た。

「ガリウスこそ、何してんのよ？」

「見回りだ見回り。今くらいが一番治安が悪いんだ」

「最近、市場で盗みを働く者がこの辺りによく逃げ込むと聞いてな……」  
クランドルの言葉に、アマレストの顔が一瞬青ざめる。幸い、彼等の目は朔耶に向いていたので、気付かれる事はなかった。朔耶はガリウス達に孤児院の窮状を話し、援助できないかと訊ねる。

「申請はしてるんだがな。ホラ、この前サクヤに持たせた書類の束があつたろ？」

「ああ、城に直接届けたやつ？ あの中にあつたんだ？」

結果はこの通り、やっぱりなどばかりにガリウスは肩を竦めて見せる。そうして先程から不安そうにこちらの様子を窺っているアマレストに声をかけた。

「つーわけだからよ、騎士団からの資金援助は無理なんだわ」

「あ、はい……そうでしたか……」

「まあ、俺んちは門閥なんで、俺が個人的に手もあるんだが……」

「えっ！ ほ、本当にですか」

ぱっと顔を上げたアマレストは、縮るような瞳を向ける。

ガリウスの実家は有名な門閥貴族ジャバール家である。ガリウス個人が騎士として稼ぐ資産など微々たるものだが、実家に頼めば相当な額が用意されるだろう。ガリウス自身は普段思うところあって、そういった送金を拒否しているのだが。

「それなりの代償は、払ってもらう事になるぜ……？」

そう言ってアマレストに近付いたガリウスは、彼女の顎をくいっと持ち上げる。思わず首を竦めたアマレストだったが、言葉の意味を理解すると、ゆっくり肩の力を抜き、涙を浮かべて頷いた。

子供達のためだと自分に言い聞かせ、震えながら目を閉じる。既にそういう方面での覚悟も決めていた身だ。門閥貴族からの援助が受けられるなら、孤児院も安泰。アマレストは二十三年間、貧しくとも清く守り抜いた貞操を捧げようとしていた。

「うわーー！ 待て待て！ 冗談だ冗談つ冗談に決まってるだろーーが！」

突然、恐怖の叫びをあげながら後退していくガリウスに、アマレストは目を開きキヨトンとする。そして後方から放たれる威圧感と周囲を照らし出す青白い光に気付き、振り返った。

そこには、巨大な漆黒の翼に雷光を纏ませた悪魔が浮いていた。

カカカアアアアン！

卷之三

「……アホだな」

漆黒の翼から放された雷に打たれる不良騎士の悲鳴と、その部下の呟きを聞きながら、アマレストは意識を手放しバッタリ倒れた。

「ん  
ん  
…  
」

孤児院の中庭にあるベンチに横たわっていたアマレストは、香ばしい匂いに空腹感を刺激されて目を覚ました。子供達のキヤツキヤツとはしゃぐ声。それを聞いて身体を起し周囲を見渡す。

「あ！ 桃姫ちゃん先生が起きたよー！」

「すっごく美味しいんだよ！ いっぱいあるんだ！」

皆日々にそう言いながら、肉や野菜の浮く白っぽいシチューを持つてきてくれた。ア

を一口食べる。

一美味しき……

「そりや良かったわ」  
眩きに応える声。ふと顔を上げると、黒髪の少女が微笑みながらそこに立っていた。  
その黒い瞳を見ていたら、次第に意識を失う直前の記憶が蘇り、アマレストは見る見る  
うちに青ざめていく。  
「あ……、あわわっ悪魔が！ 黒い悪魔が！」

「大丈夫、大丈夫だつてば！ ごめんね、脅か

朔耶はアマレストを宥めて落ち着かせると、先程は

朔耶はアマレストを宥めて落ち着かせると、先程はガリウスの質の悪い冗談に対し自分がお仕置きをした——ヤキを入れたとも言う——だけで危険は無いと説明した。さつきのアレが朔耶だと聞いてもピンと来ないアマレストは、とりあえず曖昧な返事をする。

ツ  
一  
二

「魔力石と日用品はこれで十分だろう」

「魔力石と日用品はこれで十分だろう」  
食料と魔力石と日用品を大量に抱えたガリウスとクランドルが買い出しから帰つて来た。わーっと彼等に群がつた子供達が、荷物を受け取つては院内に運び込んでいく。

二人の騎士を労つた朔耶は、改めてアマレストと向かい合つた。

「今日はあたしの方から支援しとくけど、あなた達も自力でどうにか出来るよう考えてみてね？」

「あの……サクヤさん、貴女は一体……」

アマレストが問い合わせようとした時、朔耶がふと立ち上がり、慌てて中庭中央へと駆けて行く。

「あーーこらこらっそこに手をかけちゃダメ！ お鍋が引つ繰り返つちやう！」

そう叫んで、楽しそうにはしゃぐ子供達を追い回す朔耶。その様子を見たアマレストは、感謝の念を懐きながらも、この少女がどういう立場の人間なのか不思議に思っていた。

騎士達と親しく話し、それでいて彼等を従えるほどの権力を持つ少女。

さらには何か怖いモノも喚び出していた事を思い出し、ブルブル首を振るアマレスト。そこへガリウスが首を回しながらやつて來た。ベンチに腰掛けて一息吐いた彼は、彼女の疑問に答えてやる。

「サクヤは王室特別査察官様だよ」

「王室……！」

「ふう～まったく、子供の相手は疲れるわ……む？ ガリウス、また彼女にちょっかい睨む。

「疲れててソレどころじやねー」  
追いかけっこから戻つて來た朔耶は、アマレストと並んで座るガリウスをジロリと睨む。

「ガリウスは買い出しのため、裏通りの外れにある孤児院と、街の中央通り市場との間を何度も往復させられてへとへとになつていた。ベンチから立ち上がつたアマレストは、『計算通り！』とか言つてゐる朔耶のもとに歩み寄ると、膝を突いて感謝の意を表す。

「わつちよつと、そんな事しなくていいから頭上げてよ」

「いえ、数々のご無礼をお赦し下さい。王室所縁の方からの孤児院への援助、感謝いたします」

「だから、そんな畏まらなくていいんだってばつ。大体この支援はあたしの自費だから王室云々は関係ないし」

ゆつくり顔を上げるアマレストに、朔耶は一つだけ忠告しておく。

「アマレスト達が自力でやつていけるようあたしも協力するからさ、だからさつきみた  
いに簡単に諦めて身体を許すなんて事はしないで」

「サクヤ、さま……」

じわっと涙を浮かべたアマレストを、朔耶は「ね？」と言つて優しく抱き締める。その途端、アマレストの感情があふれた。

今までずっと苦労の連続で、それでもじつと耐えてきた。そんな中こうして優しくしてくれたのは、亡き院長先生以外では初めてだった。数年ぶりに心からの安堵を得たアマレストは、朔耶の胸に顔を埋めて子供のように泣いていた。

そんなアマレストのくすんだ銀髪を優しく撫<sup>な</sup>でてやる朔耶。ベンチに座つて一部始終を見ていたガリウスは、おもむろに腕組みをすると難しい顔で唸る。

「何よ？」

「お前……同性嗜好って本当だったのか？」

この日、騎士団本部の食堂では、目を据わらせ自分が決して同性を好む者ではない旨を懇々と説き続ける朔耶と、もう勘弁してくれと泣きを入れているガリウスの姿が夜遅くまで見られたとか。

「聞きなさい、だからね？　あたしにそういうつもりが無くとも誰かの行動が誤解を招いた結果、それを見ていた人が——」

「……頼むから、マジでもう寝かせてくれー」

## 第二章 釣り船観光計画と魔力石モーター開発

先日の孤児院での一件以来、朔耶はカースティアと王都の工房を行き来する日々を送つていた。

度々アマレストのもとを訪れては街の噂話に耳を傾けたり、彼女の相談事について話し合つたりして親睦を深め、釣り船の備品を作る合間に作ったランプなどを持参したりする。いつも降り立つ派遣騎士団本部に詰める騎士や職員達も、数日おきに現れる朔耶に慣れてきたようだ。

それどころか『ああ、今日はいらっしやる日か』という具合に、朔耶のいる日は訓練や街の見回りに力を入れる『特別強化日』となっていた。強力な癒<sup>いや</sup>しの光で怪我も疲労も治してくれるので、少しばかり無理をしても大丈夫という訳である。朔耶が常に自然体で振る舞い、一般民のアマレストと親しく接している事も、騎士達から過剰な恐怖を拭<sup>ぬく</sup>い去る一因となつた。

そうして朔耶がカースティア観光事業に着手してから約一ヶ月。三艘<sup>そう</sup>分の船外機や備

品が整い、釣り船乗り場などの施設も完成。従業員の採用や料金設定、仕事内容の打ち合わせも終わったその日の昼頃、王都の自分の工房にやってきた朔耶にティルファから釣り船一号艇が完成したとの報が届いた。

「よしゃーー！ ティルファに飛ぶわよーー！」

朔耶はすぐさま一艘分の船外機や備品を工房の倉庫から引っ張り出すと、特別に用意してもらった四頭立ての貨物用竜籠に積み込んでティルファに飛んだ。

「ドマックさん！」

「来たか、早かつたな……っておいおい！ ここに降りるのかつ」

夕方頃にはティルファの上空に到着。直接ドマックの造船所脇に竜籠を着陸させた朔耶は、作業員達と一緒に荷物を降ろしながら、船外機と備品の取り付けについて話しあつた。

「全部取り付けて完成した状態にして、そのままこの竜籠で持つていこうと思つての」「ふむ、それなら航行実験は今夜にでも行う事になるのう」

ドマックは船を竜籠に積み込むためのクレーンを手配するよう部下に言い付けると、早速船外機の取り付け作業に掛かる。朔耶も船に上がってランプや魔力石コントロールなどの

備品を設置していく。

船外機は手で直接動かすのではなく、船の中央部分にある一段高くなつた操舵室から操作する事になる。操舵室と船外機を繋ぐ仕掛けの調整も必要だ。

「一応釣り道具も持ってきてるから、航行実験の時は使つてみてね」

「ふふん、新型機械船で夜釣りとは悪くない。なかなか面白そうじゃ」

そうして作業を進めていたところに、クレーンの手配に出かけていた作業員が声をかけてくる。

「サクヤさん、表の竜達がなんか鳴いてますよー？」

「あ！ いけないつ忘れてた！」

ひらりと船から飛び降りた朔耶は、着陸後放つたらかしにしていた竜達のところに走つた。

「ごめんごめん！ 殿舎に移すの忘れてたよ」

ぐでつと地面に伏せていた竜達から抗議の四重奏が響く。

「キューキュー」

「ピー……」

「キユルー……」

お腹空いたーと鳴いている竜達を連れて、朔耶はティルファの厩舎に移動した。ティルファにも街灯が導入されているが、湖の畔にまでは設置されていない。それ故、厩舎のある湖周辺は夜になるとかなり暗い。その暗闇から四頭の竜を従えて現れた朔耶に、厩舎の世話係は飛び上がらんばかりに驚いたが、竜達がお腹を鳴らすのを聞いてすぐに餌の肉塊を用意してくれた。喉を鳴らして齧り付く竜達。

「明日はかなり長く飛んでもらう事になると思うから、今日はゆっくり休んでね？」

朔耶の言葉に、四重奏で返事する竜達であつた。

「戻ったか、お前さんに客が来とるぞ」

「え？」

朔耶が造船所に戻ると、ちょうど建物内に引かれた湖水面に船を降ろすところだった。そんな中、作業員達と慎重にロープを引きながらドマツクが顎鬚で指した場所に、見覚えのある人物が立っている。長い銀髪を背中で束ねた、魔術士風の男性。朔耶がその姿に気付くと、目を細めて微笑を向けてきた。

中央研究塔所長、ブラハミルト・オードリン。ここティルファを治める最高責任者で

ある。

「こんばんは、フレグランスの精霊女神殿」

「ブラハミルトさん……。こんばんは、どうしたんですか？」

また通り名が更新されたかと密かに嘆きつつも挨拶を返し、わざわざ訪ねてきた用向きを訊く。

「いやなに、私も貴女の船に興味があつたのでね」

「そうなんですか？　じゃあこれから航行実験なので一緒に乗りります？」「もちろんですよ」

朔耶は王都の革裁縫職人の工房で作つてもらつたライフジャケットをブラハミルトに渡すと、それを身に着けるよう告げ、湖面に下ろされた釣り船一号艇に乗り込んだ。メンバーは朔耶とドマツク、ブラハミルトの他、作業員一人とブラハミルトの警護で付いてきた衛士二人である。

船のランプを灯した朔耶は、操舵室に上がつて船外機を起動する。建物から湖に出ると、どこで聞きつけたのか数十人の見物人が集まっていた。衝撃のサクヤ式機械船推進器がお披露目され、朔耶の発注を受けたドマツクが建造を始めた時から、この船には皆が注目していたのだ。機械船を前提としたフォルム、全長

七メートル、幅三・五メートル程の船体がゆづくりと桟橋付近に近付いていく。

魔力石ランプを元に作った十二個ものカンテラやランタンが煌々と船の周辺を照らし出し、近くで見ようと集まつた見物人達の姿を浮かび上がらせる。そんな彼等に向かつて、朔耶は折り畳んだライフジャケットを一着投げ込んだ。

「うわっ！」

「な、なんだっ」

イキナリ何かモコモコした四角い塊かたまりを投げ付けられて、思わず飛び退く見物人達。一人逃げ遅れた若い発明研究家がそれを受け止めた。彼は『なんじやこりや』と謎の物体を広げて観察する。

「そこのあなた！ それを身に着けて。こんな風に羽織つて前を結ぶだから、簡単でしょ？」

朔耶は自分達が着用しているライフジャケットを指して使い方を教えた。若い発明研究家は、何だかよく分からぬがサクヤ式の衣服らしい、という事でとりあえずそれを身に着ける。その間に朔耶は船を桟橋に寄せた。

「身に着けた？ ジやあ、船に乗つて」

「えつ！」

きょうがく  
驚愕した表情で固まる若い発明研究家。

今回の船は八人乗りなので一人分枠が余っていた。だからもう一人、抽選で決めたと説明して彼に乗船許可を出す朔耶。かなり不意打ちで強引な抽選だが、おかげで混乱が起きなかつたとも言える。

言葉の意味を理解した彼は大喜びで、いそいと釣り船一号艇に乗り込んだ。彼の近くで素早い身のこなしを見せた研究家達は、「何故あの時避けてしまつたのだあ！」と頭を抱えて悔しがつていた。

「それじゃあ適当に真ん中辺りまで進めたらゆづくり流すから、釣りの具合も確かめてみてね」

独特の駆動音を響かせ、釣り船一号艇は湖の中央付近に向けて航行する。そして適当な位置で船を止めると、想定している客数の五人でとりあえず釣り糸を垂れた。

航行から釣り具の管理、魔力石コンロの使用まで実際の営業内容に即した実験を一通り行い、問題無い事を確認する。もつとも、研究家やドマックは魔力石ランプやコンロに夢中で、メインの釣りはそつちのけだつたが、ブラハミルトがティルファの陸

軍に当たる都軍兵<sup>とぐんひ</sup>を動かしてくれたので、積載作業は順調に進んだ。

「カースティアにも建築作業用のクレーンがあるはずですから、それを使うといいでしよう」

「うん、ありがとね、ブラハミルトさん」

作業を終えて一息ついた朔耶は、ブラハミルトから一緒に夕飯でもどうかと誘われて中央研究塔に赴いた。ドマック造船所の皆も招待され、一階中央のステージを会場に、ちょっととした立食パーティのようなものが行われる。

皆でワイワイと食事をとりながら、朔耶はブラハミルトと色々な話をした。グランツウルモス帝国の事や、フレゲンス王国の事。先日のサムズ侵攻を煽ったと思われる商人国家キトと、その使者ヨールテスの事。時折、ブラハミルトは朔耶の世界についてさりげなく聞いてくるが、朔耶が話さなければそれ以上訊ねようとしている。紳士に徹したその態度は好感の持てるもので、朔耶は彼を『信用しても良い相手』と認めつつあった。

「なるほど、帝国ではそんな動きがありましたか」

朔耶は、帝国内の政変の理由を『裏で帝国を牛耳っていた者が討たれたから』とし、自分がグラントウルモスの先代皇帝エイディアスを討つた事はぼかしながら、その裏の

支配者が『発掘品』による不老不死の研究をしていた事なども話す。

古代魔法文明の遺物である『発掘品』の調査、研究は、かつてのティルファでも盛んに行われていた。古今東西、不老不死に関する研究に取り憑かれる者は絶えない。ティルファの研究者にも、帝国まで出向いて手を出していた者は少なからずいただろうと、ブラハミルトは表情を翳らせる。

キトに関しては、帝国内政以後も、またサムズ動乱前後も特に変化は見られなかつた。だが――

「やはり、あそこであの男を逃がしたのは私の判断ミスだったのかもしれない」

朔耶から、ヨールテスが傭兵団陣地で戦いを煽つていた事を聞いたブラハミルトは、警戒は怠らない方が良いとの自分自身への戒めも籠めてそう語つた。

『ヨールテスがあ……今頃どこで何してるんだろうね』

タシカニ アヤツカラハ ヒトニアラザル ケハイヲ カンジタ

翌日。釣り船一号艇を積んだ竜籠<sup>りゅうろう</sup>に乗り込み、まだ夜も明けきらない内からティルフまたどこかで『儲け話』でも企んでいるのかもしれないねーなどと、割と呑気な事を考へる朔耶なのであつた。

アを飛び立った朔耶は、夕方頃にはカースティアに到着していた。これから湖に船を降ろす作業を始める。その作業をする労働者達が集まるまでの間に、一旦元の世界へと帰還する。

「ただいまーっ、ご飯ご飯ー！」

「お帰りを言う間もなくソレかよ」

庭に降り立つなりバタバタとキッチンに駆け込む。そんな朔耶に、最近都築家に入り浸り、孝文と魔力石の加工アイディアを練り合っている拓朗が呆れたように声をかけた。

「ほあ？ はふひゃんひへはお？」

「まあな。石の特性も分かつたから、そろそろ俺も何か作るぜ」

「はひほほふひはん？」

「……とりあえず先にソレ食え」

冷蔵庫にあったソーセージを咥えながらも「ごっこ喋る朔耶」と会話を試みた拓朗だったが、さすがに翻訳不能だったでの、とつとと食えとばかりにソーセージを指で押し込む。

「んぐっ！ けほっ……拓ちゃん酷い」

「あ、すまん」

涙目になつて抗議されるも、もぐもぐ食べながらなのでちつとも罪悪感が湧かず、苦

笑を返すのみの拓朗だった。

「銃みたいな飛び道具にしようかと思つたんだけど、タカ君が反対するんだよな」

「そりやあね。そんな物持ち込む意味が無いし、争いの元になるだけだと思うよ？」

夕飯を食べながら拓朗の作ろうとしている物を聞いた朔耶はそう返す。銃のように強力で手軽な武器は、今のところあの世界には必要ない。

「そうかなあ、なんか怪物退治とかそういうのは無いのか？」

「いるところにはいるみたいだけど、魔術と剣でなんとかなつてゐみたいだし」

向こうの世界では朔耶にも銃など必要ないし、誰もが使えるように量産した場合、必ず悪人の手に渡るだろう。もしそうなつたら何が起きるか……という話である。事故だつて起きるかもしれない。

「サクヤ式で治安悪化！ とか、あたし嫌だよ？」

「ああ、そりやあね。お前の名前が付くんだつたよな」

「それもあるけど、街に住んでる一般の人達は荒事<sup>あらじご</sup>なんて望んでないの。平和に暮らしたい人達ばかりなんだから」

「う……」

拓朗は自分の浅はかな提案を詫びる。異世界や精靈、剣と魔術などといった話を聞くと、ついその世界で強力な現代兵器を使って活躍する場面ばかり思い描いてしまう。だが、そこに住む人々の日常という、本来最も尊重しなくてはならない部分への配慮を欠いてしまっていた。

「まあ、夢見がちな男の子だもんね」

「ははは……」

朔耶のフォローなのか追い討ちなのかよく分からぬ笑いを返した拓郎は、また何か別の物を考えると言つて自宅へと帰つていった。

夕食を終えた朔耶は、釣り船観光事業の総仕上げをするために、今日は夜中まで向こうで作業をする事を家族に告げて庭に出た。しかしふと考え込み、兄重雄を呼ぶ。

「ん？　どうした？」

「うん……、ちょっと手伝ってくれる？」

カースティアの湖近くに建てられた観光施設。釣り船乗り場には騎士団に雇われた労働者が集まり、竜籠から船を湖に降ろすための準備作業が進められていた。

既に辺りは暗くなつており、陸で篝火かがりびを焚いて明かりを確保しているが、真っ暗な湖

畔での作業は困難を予想させた。篝火船も用意しようかと騎士達が話し合っているところに、空から黒い翼を広げて舞い降りてくる黒髪の少女。

「よめきと混乱。だが本部の屋上で何度も目撃した騎士達はさすがに慣れたモノで、うろたえる労働者達を落ち着かせ、作業の指示を仰ぐべく朔耶のもとに集まってきた。

「はーいっ、下がつて下がつてー、みんな下がつてー！」

朔耶は皆を下がらせると、地面に小枝で線を引き始める。なんだろうと覗き込む人々を余所に長方形を書き上げた朔耶は、その四隅に庭から持ってきた石を置いた。魔力が籠められたそれらの石は、ほのかに発光している。

「みんな絶対この中に入っちゃダメよ？　命に関わるからね」

そう注意を呼びかけた朔耶が忽然と姿を消す。そのまましばらく、ボンヤリとした石の光が薄れていく様子を眺めていた人々は、突如四角の中に現れた物体に仰天した。

四つの車輪をつけたソレは、傭兵团が使う装甲馬車のようにも見えた。御者台は無く、全面が艶のある金属で覆われている。四方には大きな窓があり、前に突き出た顔のような部分はまるで甲冑兜かつちゆうかぶを纏つた魔獸のようだ。

その金属車の扉が開いて朔耶が降りて来る。すると二度目の混乱はすぐに収束した。騎士達は金属車の中のもう一人、朔耶と同じ黒髪をした男性の存在を気にしながら、朔

耶の周りに集まる。

「サクヤ様、これは一体……？」

「ああ、危なくないから大丈夫だよ。ちょっと作業の手伝いに呼んだの」

朔耶が振り返つて男性、すなわち重雄に合図を送ると、金属車——ランドクルーザーのエンジンが掛かつた。

聞いた事もないような瞬きと咆哮<sup>ほうこう</sup>、そして生き物には見えないが生き物としか思えないと低い唸り声と脈動。その様を見た騎士達は『やはり魔獸の類か』と、思わず後退つてしまふ。さらにその魔獸の目が強烈な光を放つ。労働者達は一斉に逃げ出しそうになつたが、至近距離にいる騎士達がその場から動かず、なおかつ光を浴びても無事であるのを見て、どうにか踏み止まつている。

「はいはい、囁み付きやしないから大丈夫よ。じゃあみんな、船を降ろす作業を始めるわよー！」

浮き足立つてゐる騎士や労働者達に声を張り上げて、朔耶は作業開始を告げた。

こちらに転移する前、朔耶は以前ドマックの工房で船外機の取り付け作業を行つた際に夜の暗さで結構苦労した事を思い出し、何か強力な照明はないものかと考えた。工事現場で使うような、広範囲を明るく照らし出せる照明は、さすがに家の倉庫にも置いてあるのを見て、どうにか踏み止まつている。

ない。なので兄の車のヘッドライトを使う事にしたのだ。問題はあまりカースティニアから離れた場所に転移してしまつと、作業に間に合わなくなつてしまふ事。そして神社の精靈と相談した結果、正確な座標に転移する方法として、特定の物質に強力な魔力を籠<sup>こ</sup>め、そこを目印に眺べば行けそうだという結論に至つたのだ。

地面は湖に向かって少し傾斜しているため、ヘッドライトの光はいい感じに作業現場を照らし出している。まるで昼間のような明るさに加え、労働者達がこの珍しい状況に興奮していた事もあってか、作業は順調に進んでいた。

そこへ、見回りに出ていたガリウスとフランが、街の人からの通報を受けて様子を見にやって來た。

「おー？ なんだこりや、魔獸の類があ？」

「凄い光だなあ、これもサクヤちゃんの力なのかな？」

二人は物珍しそうにランドクルーザーを觀察している。朔耶が関係していると知つた時点で、何も心配はしていなかつたようだ。

「あ、いいところに！」

「俺は見回り中。用事ならフランが引き受けるぜ」

いて詳しく知っている者にしか出来ない用事なので、朔耶はそのままフランに頼んだ。

「フラン君、観光事業で契約してゐる船長さん達と宿の主人さん達を呼んで来てくれる?」

朔耶は今日中に諸々の調整を済ませて明日からでも営業を開始したいと思つていた。そのための構想も、十四時間に及ぶティルファからの移動中に考えてある。『思い立つたら即行動』の家訓に従い、朔耶は練り上げた構想を現実化していく。

やがて、強力なヘッドライトに照らされた湖の畔で歓声があがつた。船が無事、湖に降ろされたのだ。ふわりと宙を舞つて船に乗り込んだ朔耶は、船のランプを全て灯すと、操舵室に上つて船外機を起動させた。

独特の駆動音を響かせながら帆もオールも無しに動き出す船に、またもどよめきと歓声があがる。重雄も愛車のサンルーフから顔を出して、釣り船乗り場の桟橋に向かうサクヤ式機械船、釣り船一号艇の雄姿を感慨深く眺めていた。

少しして、契約している船長に料理人と補佐、事業を提携する一般宿と貴族用宿の主がフランに連れられてやつて来る。そして釣り船に乗り込み、朔耶の説明を受けながらライフジャケットを身に着けた。

船長には船外機の機能と操作方法をレクチャーしつつ、補佐役にも航行中に客が釣りだつけ

を楽しんでいる間や接岸時の役割を伝える。料理人には魔力石コンロの使い方を教え、足りない調味料などがあれば申請するよう言い添えた。

「あと二人乗れるけど、フラン君とガリウスも乗つてみる? あ、ガリウスは見回り中だつけ」

「乗る乗る!」

「見回りはさつき終わつたぜ」

フランは嬉々として乗り込み、ガリウスは予想通りしつとフランの後に続いた。ライフジャケットは騎士の甲冑の上からでも何とか着る事が出来たが、騎士達は非常に斬新で奇抜な姿となつた。ぶつちやけ、凄く格好悪い。

「これはひどい」

鎧の上から着てもそこそこ見られるデザインを考えようと本気で考える朔耶。実際、フル装備の騎士を今の仕様で浮かせられるのかという点にも不安が残る。

朔耶はとりあえず湖畔にいる兄に手を振り、ハイビームによる返答を確認してから船長に船を出すよう指示を出した。

一帯を照らすランドクルーザーの光が一段と輝きを増して、釣り船一号艇の姿を浮かび上がらせる。桟橋近くでは大勢の労働者や騎士達、それに野次馬達がこのイベントを

見物していた。

「素晴らしい船だ！」

船長はすぐに船外機の動かし方を覚えてその性能を絶賛。このサクヤ式機械船で仕事が出来る事を喜び、釣り船観光事業の成功に向けて尽力する事を誓つた。

宿の主人二人は、料理人と一緒になつて魔力石コンロを弄つており、つまりで火加減を調節しては唸るという事を繰り返していた。補佐役は釣り客の世話の予行演習として、ガリウスとフランに釣り具を用意し、餌をつけ、網を持つて待機する。船周辺や船内の様子に気を配る事も忘れない。

やがて釣り具を渡されたガリウスが大物を釣り上げ、早速料理人がコンロで焼いているところに、フランもそこそこの獲物を釣り上げた。二台のコンロを使って魚を焼けば、煙は船室内に充満する事無く順調に排出され、改めて問題なしと判断できた。

「これなら、いけそうだね」

船を乗り場に戻してしつかり係留した後、朔耶は空になつた竜籠が放置されている作業開始地点に戻る。そして見物人達を解散させて、労働者に報酬を支払うよう騎士達に指示を出した。竜籠は明日回収する事にする。

ぞろぞろ移動を始める労働者達と見物人達の視線の先では、未だ強力な光で湖面を照

らす魔獸のような金属車に、召喚主の少女が乗り込むところだった。

「上手くいったみたいだな」

「うん！ あ……お兄ちゃんも船、乗りましたか？」

釣り船に船外機を使おうと言つた発案者は重雄である。その船関連でこちらの世界に連れて来ておいて、照明係をさせたダケというのは何やら申し訳ない。そう気に掛ける朔耶に、兄はまた次の機会で良いと笑つた。

回収した庭の石を座席の足元に置いてシートにもたれた朔耶は、一息吐きながら神社の精霊に帰還を呼びかける。

『帰ろ』

ウム

騎士や労働者達が見守る中、朔耶と謎の人物を乗せた金属車が忽然と消え失せたが、今度は混乱やザワメキが起きる事はなかった。

「サクヤ様だからなあ」

一人の騎士の呟きが、全員の心を代弁した。